

保育現場における運動遊びの展開

The Development of Physical Play in Nursery School

増 田 公 男

Kimio MASUDA

【問 題】

近年、子どもたちの体格は向上しているが、体力や運動能力には長期にわたる低下傾向が認められるという指摘がなされている（文部科学省，2002，2009，2015；杉原・近藤ら，2007など）。文部科学省が毎年実施している「体力・運動能力調査」によれば，1985年頃を頂点としてその後低下傾向が認められるようになった。それに対する施策として同省は，体力向上のための対策を提唱し2003年度からおもに小学生を対象として「子ども体力向上推進事業」を推進してきた。具体的には体育の授業や健康教育などの取り組みが効果を上げ，2008年ころからは歯止めがかかり，向上の兆しもみられるともいわれている（文部科学省，2009，2011，2015など）が，課題も多い。

幼児期の子どもたちが長時間を過ごす保育現場からも，体力や運動能力の低下への懸念が示された。山田・長堂ら（2005），山田・加藤ら（2007）は幼児の運動機能向上のために週1回1時間からなる「運動遊びプログラム」を提案し年間45回実施した結果，25m走などで一定の効果を得ている。また，中・大河内（2006）は3歳児から5歳児（10月生ま

れ以降の早生まれ群と9月までの遅生まれ群とに分けた6年齢群）を対象に，保育所での週5日間にわたる約30分間の「特別運動遊び」と称した運動遊びを5ヶ月間経験させることによる効果を調査した。その間の発達による伸びを十分に考慮していない点に問題はあるが，腕立体支持を除く25m走，立幅跳び，ボール投げ，片足連続飛び，握力，背筋力（3歳遅生まれ群は有意にはいかなかった）の6種目で有意な向上が各年齢群で確認された。

幼児期からの運動の必要性に鑑み，ここでも文部科学省は「幼児期運動指針」をもうけるにいたった（幼児期運動指針策定委員会，2012）。幼児期運動指針を通知するに際して同省は，2007年度に始めた3年間の調査研究から社会の変化による体を動かす機会の減少傾向があり，それがその後の発達期において運動等に親しむ資質や能力の育成を阻害するだけでなく，意欲や対人関係などの子どもの発達全体に重大な影響を及ぼす可能性を指摘した。そして，その普及用パンフレットでは，幼児が毎日の60分以上，楽しく体を動かすことを提唱している。ただし，こうした施策が保育現場で十分に活用・機能しているかについては，疑問があるという（細川，2014）。

工藤・江刺家（2016）は、保育現場の報告として、疲れやすい、転びやすく、顔から転び前歯を折ったり手首を骨折したり、体を動かす運動遊びを避けることなどをあげている。そして、彼らは、幼稚園と保育所における子どもたちの遊びの観察や保育者へのインタビューを通して、運動能力の低下を認識した保育者たちが、意図的・計画的に運動遊びを取り入れていることを明らかにした。さらに、ここでは、保育のあり方として幼児の意欲をかき立てる遊びの準備、同年齢・異年齢の仲間とのかかわりを大切に、保育者は様子を見守り、認め、褒め、励ます保育を展開していたという。

より長期的な観点からすれば、子どもの体力・運動能力に歯止めがかかったとしても、定期的な活動の意義は大きい。木村・村岡（2009）によれば、クラブ活動やスポーツ系の習い事等への参加者とそうでない子どもたちの間に差が生じているという指摘もある。こうした積極的、意図的な運動への取り組みが効果を及ぼすことから、高見・涌井（2011）は4、5歳児に対する運動遊びプログラムを提供し、その効果を調べた。一方には1回あたり45分間の室内でのマット、跳び箱など多様な運動遊び（体育遊び）を1年間に19回、他方には室内プールでの水泳の基礎を含む水中での運動遊び（水泳遊び）をそれぞれ1年間に29回それぞれ実施した。前者に10回以上参加した運動遊び群、後者に15回以上参加した水泳遊び群、両方の条件を満たす両方遊び群および不参加群を設定し比較した。その結果、日本体育協会スポーツ科学委員会（1982）が編集した5種目の幼児体育テストのうち、ボール投げと立ち幅跳びで運動遊び参加の3群が不参加群より有意に優れていた。また、井上（2014）は小学生4年生を対象に1年間にわたる体育授業の開始時10分間の体

力向上プログラム（平衡・移動・操作系の6種）を継続的に実施しその効果を調べた。全国平均との比較において特に体力テストの総合評価の低いものが少なくなるとともに、1年間の増加率において、体力合計点をはじめ反復横跳び、20mシャトルラン、立ち幅跳びで男女とも全国平均を上回った。高原・角南ら（2014）は、4、5歳児への3週間にわたる自由遊び時の自由選択型運動プログラムの影響を調べた結果、年齢・性によって異なるが、両足連続跳び越し、開眼片足立ち、立ち上がりパワーで効果を見いだした。このように計画的なプログラムの実践は、子どもの運動能力の向上に効果があることを示唆する研究は少なくない。しかし他方、保育時間内に運動指導を行っている園よりも、していない園の方が運動能力が低いという研究も散見されるのも事実である（森・杉原ら、2004；杉原、2008など）。

運動量や運動能力には、人的環境要因が影響することが検討されており、保育者や母親の関わりが取り上げられてきた。柳田（2008）の幼稚園教諭の指導理念に関する調査では、5領域と運動遊びを加えた質問-12問とそれらの合成スコアの6カテゴリーへの回答で、重視している指導・援助のなかで運動遊びは最下位になっていた。村岡（2001）は運動遊びに意欲的でない幼児についての実践研究で、3歳時点での的確な子ども理解に基づく指導が重要だと主張し、受容、見守り、粘り強い働きかけが大切だとしている。また、井上・山瀧ら（2006）は母親の要因を検討した。2、3歳児で「活動的」な母親の子どもや「外に出かけることが好き」な母親の子どもは、日常的な歩行量が有意に多かった。そして、幼児の日常の歩行量は、2、3歳児、4歳児ともに20m走での速さ、立ち幅跳びの跳躍量との間でそれぞれ有意な相関を見いだした。

本報告は、保育活動に取り入れるべき運動遊びカテゴリーについて分析するとともに、伝承的遊びやスポーツ活動の範疇に相当するものも含む、幼児の運動をともなう遊びの保育への意図的な取り入れについて、保育者の意識を調査する。さらに、保育者が保育現場でどのように指導計画に反映させ、子どもたちが自由遊びでのなかでどのように展開しているかなどを、保育者としての経験年数とどんな関係があるかを明らかにするために計画された。

具体的には、保育者の保育活動に取り入れたい運動遊びの程度を遊びのカテゴリーごとに明らかにし、さらに、これまでの保育経験で意図的に取り入れた遊び、子どもたちの自由遊びのなかで展開していた遊びおよび保育者自身の遊び経験の回答から、それぞれの特徴を明らかにするとともに両者の関係を明確にしたい。その際、保育者としての経験年数を3段階に分け、どのように関係しているかを検討する。

【方法】

1. 調査協力者および時期

調査対象は愛知県内の公立保育園の保育士で、今回の分析では211名（全員女性）を対象とし、平均保育士経験年数は、16.0年（SD=11.26）であった。保育士経験年数に関しての分析においては、10年以下の経験者（75名、平均4.9年；以下S群）、10年を超え25年以下の経験者（83名、平均15.4年；M群）、25年を超える経験者（53名、平均32.8年；L群）の3群に分けた。

調査時期は2009年12月で、つぎに示す調査内容について保育園ごとに配布し、実施・回収された。

2. 調査内容

各保育者には、小黑（1998）の運動遊びの

保育活動に意図的に取り入れる必要度への意識に関する15項目（表1参照）について、1から5の5件法で評定（得点範囲-15~75）を依頼した。

また、森・岸本ら（2002）が遊び体験の研究で用いた59種類のなかから、幼児期の保育園での遊びとして経験する機会が想定されにくい、登山・ハイキング、スキーなど9種類を除いた50種類の具体的な運動をともなう遊び（表3参照）を提示した。そして、以下の3つの観点から、各遊びを評定してもらった。それらは「保育者として保育活動に取り入れ意図的に行った遊び」（以下、保育者意図）、「自由遊びのなかで子どもたちが展開していた遊び」（以下、子ども展開）、「回答者自身の遊びの経験」（以下、保育者自身）の3つの観点であり、各遊びの経験のある遊びについて丸印をつけ回答するように求めた。なお、保育者自身の遊び経験からの回答の際には、各遊びの内容・方法について知っているか否かという知識についても、合わせて収集した。

【結果と考察】

1. 保育者の運動遊びの保育活動へ意図的に取り入れる意識について

保育者の運動遊びへの意識は全体的に積極的で全体の合計得点の平均値は66.9であり、もとの小黑（1998）の56.7に比べてかなり高くなっていた。L群（69.6, SD=4.41）が最も高く、残りの2群間の差異は少なく、S群（66.4, SD=5.37）、M群（65.9, SD=6.47）とつづいた。全項目の平均は4.46となっており、全対象および経験年数群ごとの各項目の平均値は、表1に掲載したとおりである。全体の平均値について、経験年数の3群の1要因の分散分析を実施したところ、有意差が確認され（ $F=4.83$, $df=2/208$, $p<.01$ ）、下位検定の結果、S群とM群間に差はなかったが、

表1 保育活動に意図的に取り入れるべき運動遊びカテゴリー（平均順と標準偏差および小黒との比較）

順位(全体)	遊びのカテゴリー	略称	平均値	標準偏差	S群	M群	L群	小黒(1998)
1	散歩	散歩	4.83	0.412	4.85	4.77	4.92	4.23
2	鬼ごっこ, かくれんぼ集団遊び	鬼ごっこ	4.83	0.404	4.79	4.76	4.94	3.96
3	水遊び	水遊び	4.79	0.409	4.77	4.71	4.87	4.23
4	かけっこ等走る遊び	かけっこ	4.71	0.504	4.67	4.64	4.85	3.96
5	花いちもんめ等わらべ歌, 伝承遊び	花いちもんめ	4.64	0.557	4.60	4.59	4.79	4.12
6	リズム体操等音楽に合わせる遊び	リズム遊び	4.62	0.514	4.63	4.57	4.77	4.07
7	ドッジボール, サーカーなどボール遊び	ドッジボール	4.60	0.556	4.55	4.53	4.74	3.73
8	なわ, 輪, ボール, 新聞紙使用	なわ	4.57	0.569	4.53	4.52	4.68	4.01
9	巧技台, 大型積み木, 段ボール等	巧技台	4.55	0.605	4.53	4.40	4.66	4.01
10	ブランコ・ジャングルジム等固定玩具	ブランコ	4.52	0.698	4.36	4.54	4.68	3.28
11	ウルトラマン, アンパンマン, ままごとなど	ウルトラマン	4.48	0.684	4.41	4.41	4.60	3.41
12	アスレチック系固定玩具	アスレチック	4.34	0.687	4.25	4.30	4.42	3.64
13	三輪車, 二輪車等の乗り物遊び	三輪車	4.32	0.710	4.28	4.19	4.47	3.02
14	高い所に登っての遊び	高所遊び	3.72	0.857	3.52	3.65	3.94	3.53
15	相撲	すもう	3.42	0.830	3.40	3.34	3.51	3.30

これらとL群の間には差が明らかになった（S L間； $t=2.62$, M L間； $t=2.90$: 両者とも $df=208$, $p<.05$ ）。このように運動遊びの取り入れ意識は、全体として積極的であるだけでなく、もっとも経験年数の長い保育士がよりその傾向が強いことが明らかになった。

各遊びごとに概観すると、上位3項目は「散歩」、「鬼ごっこ」、「水遊び」で、「かけっこ」、「花いちもんめ」、「リズム体操」までが4.6以上であり、上位10項目までが4.5を超え、4以下の平均評定は「すもう」と「高所遊び」だけであった。

もとの調査である前述の小黒（1998）の新潟県内の保育士・幼稚園教諭のクラス担任（415名）の結果とここでの全体と比較すると、前者の平均が3.78であったのに対して本結果は前述のように4.46であり、平均値間に0.68の差が生じた。すべての項目で本結果の方が高くなっており、特に「三輪車」と「ブランコ」では1以上の差があり、差の小さいものは「すもう」と「高所遊び」で、各々0.10と0.15で、それぞれ評定が低いものだけであった。大きな差異があらわれた背景には、今回の調査対象の公立保育園では数年ごとに実践・調査に取り組んでおり、調査時点では「発達

を踏まえた運動遊び、集団遊び、伝承遊び」をテーマとしており、このことが運動遊びへの積極性に反映している可能性が高い。ただし、両調査の得点間に差異はあったが両者の相関は高く、有意であることが確認された（ $r=.651$, $t=3.09$, $df=13$, $p<.01$ ）。

また、各遊びごとの分散分析の結果、経験年数の要因による有意な傾向を含む同様の差異が15項目中の12項目で示され、差異が確認されなかったのは、「アスレチック」、「なわ」、「水遊び」だけであった。差異のあったなかでは、合計点と同様にL群が高く、S群、M群の順になっており、S、M群間の差が少なかったものが10項目を占めた。

保育者の運動経験の重要性に対する認識は希薄で、放任主義的な指導・援助に陥りがちであるという指摘（柳田，2008；細川，2014）もある。他方、高見・涌井（2011）や藤田・石橋（2001）のように意図的な働きかけによる運動能力への正の効果の報告もあり、その指導計画の中身、プログラムの構成が重要であるといえよう。

15種類の遊びカテゴリーについて、2から5までの因子数で因子分析を実施したところ、3因子で最適解を得た。表2に示したように

表2 保育活動に意図的に取り入れるべき運動遊びカテゴリーの因子分析の結果
(バリマックス回転後)

項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性
ブランコ・ジャングルジム等固定玩具	0.690	0.173	0.254	0.571
アスレチック系固定玩具	0.668	0.200	0.030	0.488
なわ, 輪, ボール, 新聞紙使用	0.544	0.238	0.450	0.555
三輪車, 二輪車等の乗り物遊び	0.519	0.395	0.203	0.466
巧技台, 大型積み木, 段ボール等	0.506	0.222	0.413	0.476
相撲	0.441	0.086	0.194	0.240
高い所に登っての遊び	0.415	0.308	0.091	0.276
リズム体操等音楽に合わせる遊び	0.199	0.710	0.354	0.669
ウルトラマン, アンパンマン, ままごとなど	0.310	0.621	0.055	0.485
花いちもんめ等わらべ歌, 伝承遊び	0.215	0.560	0.300	0.450
水遊び	0.286	0.525	0.283	0.437
散歩	0.092	0.515	0.337	0.387
鬼ごっこ, かくれんぼ集団遊び	0.163	0.277	0.774	0.702
ドッジボール, サッカーなどボール遊び	0.185	0.265	0.601	0.466
かけっこ等走る遊び	0.389	0.258	0.570	0.543
因子寄与	2.596	2.390	2.223	7.209
寄与率 (%)	17.3	15.9	14.8	48.0

第1因子は、固定玩具、乗り物遊び、なわ等での遊び、大型積み木などの「比較的大型の玩具を含む遊び」で、第2因子は、リズム・音楽遊び、伝承遊び、水遊び、散歩などの「音楽遊び・伝承遊びと散歩」で、第3因子は、鬼ごっこ等の集団遊び、ルールをとまなうボール遊び等の「ゲーム性を含む遊び」であった。ただし、明確な因子構造ではなかった。

2. 運動遊びの保育活動への意図的取り入れ、自由遊び場面での展開および保育者自身の遊び経験の分析

(1) 全体の概要

今回調査対象とした全保育士の運動遊びの保育活動への取り入れ、子どもたちの自由遊びでの展開および自分自身の子どもの時代の遊び経験について、表3に示した経験のあるものの割合について概観する。これらについて上位15位までを比較した(同率が生じたため保育者自身は16位までとなった)。観点別では、順に15位、17位、34位までが75%を超えていた。

それぞれの観点の上位3位まででは、意図

的に取り入れた遊びでは、「鬼ごっこ」、「うずまきじゃんけん」、「長縄跳び」で、「あやとり」、「鉄棒」がつづき、自由遊びで展開していた遊びでは、「鬼ごっこ」、「ままごと」、「すべり台」につづき「鉄棒」、「あやとり」となっていた。保育者自身の遊びでは、「はないちもんめ」、「鬼ごっこ」、「だるまさんがころんだ」がそれぞれの上位3位で、「長縄跳び」、「かくれんぼ」がつづいた。

3つの観点で共通して遊び率が高かったのは、「鬼ごっこ」(順位はS群から順に1・1・2)、「うずまきじゃんけん」(2・12・8)、「長縄跳び」(3・15・4)、「あやとり」(4・5・14)、「鉄棒」(5・4・7)等であった。3者間の15位までの共通する遊びについては、意図と自由では10種、意図と自身でも10種、自由と自身では13種が確認され、関係性が強いことが示された。

観点間の共通性に関して他の視点からの分析として、遊びの種類数について、全保育士を対象に相関を求めたところ、保育者意図と子ども自由展開の間が0.566、保育者意図と保育者自身の間が0.326、子ども自由展開と

保育現場における運動遊びの展開（増田 公男）

表 3 - 1 全体および保育士経験年数群別の 3 観点別遊び経験率（保育者意図）

順位	保育者意図 対象全体	%	保育者意図 S群	%	保育者意図 M群	%	保育者意図 L群	%
1	5 鬼ごっこ	91.5	5 鬼ごっこ	89.3	5 鬼ごっこ	89.2	2 あぶくたった	98.1
2	9 うずまきじゃんけん	86.7	16 長縄飛び	84.0	9 うずまきじゃんけん	88.0	5 鬼ごっこ	98.1
3	16 長縄飛び	86.7	9 うずまきじゃんけん	77.3	31 ドッジボール	85.5	9 うずまきじゃんけん	98.1
4	49 あやとり	83.9	29 ままごと	77.3	16 長縄飛び	83.1	49 あやとり	98.1
5	28 鉄棒	82.5	28 鉄棒	76.0	49 あやとり	81.9	1 はいちもんめ	96.2
6	31 ドッジボール	82.0	49 あやとり	76.0	15 短縄跳び(縄跳び)	79.5	16 長縄飛び	96.2
7	1 はいちもんめ	78.2	7 氷鬼	70.7	28 鉄棒	79.5	28 鉄棒	96.2
8	15 短縄跳び(縄跳び)	78.2	24 平均台	70.7	47 人形遊び	79.5	8 だるまさんがころんだ	94.3
9	10 だるまさんがころんだ	77.7	31 ドッジボール	69.3	20 たけうま	77.1	10 だるまさんがころんだ	94.3
10	29 ままごと	77.7	1 はいちもんめ	68.0	1 はいちもんめ	75.9	15 短縄跳び(縄跳び)	94.3
11	7 氷鬼	77.3	10 だるまさんがころんだ	68.0	2 あぶくたった	75.9	20 たけうま	94.3
12	2 あぶくたった	76.3	8 だるまさんがころんだ	65.3	6 色鬼	75.9	31 ドッジボール	94.3
13	20 たけうま	76.3	15 短縄跳び(縄跳び)	65.3	10 だるまさんがころんだ	75.9	23 うんてい	92.5
14	8 だるまさんがころんだ	75.4	20 たけうま	62.7	29 ままごと	75.9	45 ハンカチ落とし	92.5
15	24 平均台	75.4	2 あぶくたった	61.3	7 氷鬼	74.7	6 色鬼	90.6
16	6 色鬼	74.4	6 色鬼	61.3	45 ハンカチ落とし	73.5	7 氷鬼	90.6
17	47 人形遊び	73.0	12 ケンパー	61.3	8 だるまさんがころんだ	72.3	24 平均台	90.6
18	45 ハンカチ落とし	71.6	27 すべり台	61.3	24 平均台	69.9	12 ケンパー	83.0
19	23 うんてい	70.1	47 人形遊び	60.0	27 すべり台	68.7	13 かくれんぼ	81.1
20	27 すべり台	69.2	13 かくれんぼ	58.7	12 ケンパー	66.3	19 缶ぽっくり	81.1
21	12 ケンパー	68.7	23 うんてい	58.7	13 かくれんぼ	66.3	27 すべり台	81.1
22	13 かくれんぼ	67.3	22 ジャングルジム	57.3	23 うんてい	66.3	29 ままごと	81.1
23	39 草花遊び	64.5	45 ハンカチ落とし	54.7	22 ジャングルジム	63.9	39 草花遊び	81.1
24	22 ジャングルジム	63.5	39 草花遊び	53.3	39 草花遊び	63.9	47 人形遊び	81.1
25	50 お手玉	60.7	50 お手玉	45.3	50 お手玉	62.7	4 かごめかごめ	79.2
26	4 かごめかごめ	59.2	4 かごめかごめ	44.0	4 かごめかごめ	60.2	50 お手玉	79.2
27	19 缶ぽっくり	54.0	19 缶ぽっくり	37.3	19 缶ぽっくり	51.8	17 ゴム跳び	71.7
28	33 サッカー	48.1	33 サッカー	37.3	43 まりつき	50.6	22 ジャングルジム	71.7
29	43 まりつき	47.4	43 まりつき	30.7	33 サッカー	43.9	25 ろくぼく	69.8
30	18 フラフープ遊び	39.8	18 フラフープ遊び	29.3	18 フラフープ遊び	43.4	33 サッカー	69.8
31	17 ゴム跳び	38.4	26 たいこばし	26.7	26 たいこばし	37.3	43 まりつき	66.0
32	26 たいこばし	38.4	30 すもう	25.3	30 すもう	37.3	32 自転車	60.4
33	25 ろくぼく	36.5	44 山くずし	24.0	32 自転車	37.3	46 おはじき	60.4
34	32 自転車	36.5	17 ゴム跳び	21.3	44 山くずし	37.3	26 たいこばし	56.6
35	30 すもう	35.5	32 自転車	18.7	25 ろくぼく	33.7	3 とおりゃんせ	54.7
36	44 山くずし	32.2	25 ろくぼく	16.0	17 ゴム跳び	32.5	40 陣取り	54.7
37	46 おはじき	30.3	51 おはじき	14.7	42 馬跳び(どう馬)	31.3	18 フラフープ遊び	49.1
38	42 馬跳び(どう馬)	28.4	42 馬跳び(どう馬)	10.7	46 おはじき	25.3	42 馬跳び(どう馬)	49.1
39	3 とおりゃんせ	26.5	48 ビー玉	10.7	3 とおりゃんせ	24.1	14 缶けり	47.2
40	40 陣取り	25.1	3 とおりゃんせ	9.3	40 陣取り	24.1	30 すもう	47.2
41	14 缶けり	17.5	11 Sけん	6.7	21 一輪車	14.5	44 山くずし	35.8
42	48 ビー玉	15.2	21 一輪車	5.3	48 ビー玉	14.5	41 石けり	32.1
43	11 Sけん	13.7	40 陣取り	5.3	14 缶けり	10.8	11 Sけん	30.2
44	41 石けり	11.8	41 缶けり	4.0	11 Sけん	9.6	48 ビー玉	22.6
45	21 一輪車	10.0	41 石けり	2.7	41 石けり	7.2	36 野球・ソフトボール	13.2
46	36 野球・ソフトボール	5.2	34 バレーボール	1.3	36 野球・ソフトボール	3.6	21 一輪車	9.4
47	34 バレーボール	1.4	36 野球・ソフトボール	1.3	34 バレーボール	2.4	34 バレーボール	0.0
48	38 剣道	0.9	35 テニス	0.0	38 剣道	2.4	35 テニス	0.0
49	35 テニス	0.5	37 柔道	0.0	35 テニス	1.2	37 柔道	0.0
50	37 柔道	0.5	38 剣道	0.0	37 柔道	1.2	38 剣道	0.0

注1 順位は、同率の場合は質問項目順
注2 遊びの前の数字は質問項目番号

表3-2 全体および保育士経験年数群別の3観点別遊び経験率(子ども展開)

順位	子ども展開 対象全体	%	子ども展開 S群	%	子ども展開 M群	%	子ども展開 L群	%
1	5 鬼ごっこ	93.4	29 ままごと	93.3	29 ままごと	94.0	5 鬼ごっこ	96.2
2	29 ままごと	92.9	5 鬼ごっこ	92.0	5 鬼ごっこ	92.8	23 うんてい	96.2
3	27 すべり台	90.5	27 すべり台	90.7	27 すべり台	89.2	27 すべり台	92.5
4	28 鉄棒	87.7	28 鉄棒	86.7	28 鉄棒	88.0	15 短縄跳び(縄跳び)	90.6
5	49 あやとり	85.8	22 ジャングルジム	85.3	47 人形遊び	86.7	29 ままごと	90.6
6	22 ジャングルジム	85.3	47 人形遊び	82.7	49 あやとり	86.7	49 あやとり	90.6
7	23 うんてい	83.9	49 あやとり	81.3	31 ドッジボール	85.5	6 色鬼	88.7
8	47 人形遊び	83.4	23 うんてい	78.7	22 ジャングルジム	84.3	7 水鬼	88.7
9	7 水鬼	81.0	9 うずまきじゃんけん	77.3	7 水鬼	80.7	28 鉄棒	88.7
10	15 短縄跳び(縄跳び)	80.6	15 短縄跳び(縄跳び)	77.3	23 うんてい	80.7	20 たけうま	86.8
11	31 ドッジボール	78.7	7 水鬼	76.0	10 だるまさんがころんだ	79.5	22 ジャングルジム	86.8
12	9 うずまきじゃんけん	78.2	6 色鬼	72.0	16 長縄跳び	79.5	1 はないちもんめ	84.9
13	6 色鬼	77.3	8 だろけい(泥棒巡査)	72.0	15 短縄跳び(縄跳び)	77.1	9 うずまきじゃんけん	84.9
14	10 だるまさんがころんだ	76.8	10 だるまさんがころんだ	72.0	1 はないちもんめ	75.9	31 ドッジボール	84.9
15	16 長縄跳び	76.8	13 かくれんぼ	72.0	6 色鬼	74.7	2 あぶくたった	81.1
16	1 はないちもんめ	76.3	16 長縄跳び	72.0	8 だろけい(泥棒巡査)	74.7	8 だろけい(泥棒巡査)	81.1
17	8 だろけい(泥棒巡査)	75.4	1 はないちもんめ	70.7	9 うずまきじゃんけん	74.7	10 だるまさんがころんだ	79.2
18	13 かくれんぼ	73.5	31 ドッジボール	66.7	13 かくれんぼ	74.7	16 長縄跳び	79.2
19	20 たけうま	67.8	48 ビー玉	65.3	39 草花遊び	67.5	47 人形遊び	79.2
20	39 草花遊び	66.8	20 たけうま	61.3	2 あぶくたった	63.9	39 草花遊び	77.4
21	2 あぶくたった	61.6	39 草花遊び	58.7	20 たけうま	61.4	13 かくれんぼ	73.6
22	33 サッカー	56.4	33 サッカー	53.3	30 サッカー	55.4	19 缶ぽっくり	66.0
23	50 お手玉	50.2	2 あぶくたった	45.3	50 お手玉	55.4	4 かごめかごめ	62.3
24	19 缶ぽっくり	46.9	50 お手玉	41.3	19 缶ぽっくり	48.2	33 サッカー	62.3
25	4 かごめかごめ	44.1	12 ケンパー	40.0	26 たいこばし	45.8	24 平均台	54.7
26	12 ケンパー	43.6	19 缶ぽっくり	32.0	4 かごめかごめ	44.6	50 お手玉	54.7
27	26 たいこばし	39.8	4 かごめかごめ	30.7	12 ケンパー	42.2	12 ケンパー	50.9
28	18 フラフープ遊び	35.1	26 たいこばし	26.7	18 フラフープ遊び	42.2	26 たいこばし	49.1
29	43 まりつき	35.1	18 フラフープ遊び	22.7	43 まりつき	39.8	17 ゴム跳び	47.2
30	48 ビー玉	33.6	43 まりつき	21.3	32 自転車	33.7	43 まりつき	47.2
31	24 平均台	33.2	24 平均台	20.0	24 平均台	31.3	45 ハンカチ落とし	47.2
32	32 自転車	30.8	30 すもう	17.3	25 ろくぼく	28.9	32 自転車	45.3
33	17 ゴム跳び	27.0	32 自転車	17.3	30 すもう	27.7	40 陣取り	45.3
34	25 ろくぼく	24.6	17 ゴム跳び	16.0	44 山くずし	27.7	18 フラフープ遊び	41.5
35	45 ハンカチ落とし	24.2	44 山くずし	13.3	17 ゴム跳び	24.1	25 ろくぼく	41.5
36	44 山くずし	23.2	45 ハンカチ落とし	9.3	45 ハンカチ落とし	22.9	51 おはじき	37.7
37	30 すもう	22.7	25 ろくぼく	8.0	48 ビー玉	20.5	3 とおりゃんせ	35.8
38	40 陣取り	19.9	51 おはじき	6.7	51 おはじき	20.5	44 山くずし	30.2
39	46 おはじき	19.9	40 陣取り	5.3	40 陣取り	16.9	14 缶けり	28.3
40	3 とおりゃんせ	15.6	3 とおりゃんせ	4.0	3 とおりゃんせ	13.3	11 Sけん	22.6
41	14 缶けり	13.3	11 Sけん	4.0	14 缶けり	12.0	30 すもう	22.6
42	42 馬跳び(どう馬)	11.4	14 缶けり	4.0	42 馬跳び(どう馬)	12.0	41 石けり	20.8
43	41 石けり	10.4	21 一輪車	4.0	21 一輪車	10.8	42 馬跳び(どう馬)	20.8
44	11 Sけん	9.5	42 馬跳び(どう馬)	4.0	41 石けり	10.8	36 野球・ソフトボール	9.4
45	21 一輪車	7.6	41 石けり	2.7	11 Sけん	6.0	48 ビー玉	9.4
47	36 野球・ソフトボール	4.7	34 バレーボール	1.3	36 野球・ソフトボール	4.8	21 一輪車	7.5
48	34 バレーボール	1.9	36 野球・ソフトボール	1.3	34 バレーボール	2.4	34 バレーボール	1.9
49	35 テニス	0.0	35 テニス	0.0	35 テニス	0.0	35 テニス	0.0
50	37 柔道	0.0	37 柔道	0.0	37 柔道	0.0	37 柔道	0.0
51	38 剣道	0.0	38 剣道	0.0	38 剣道	0.0	38 剣道	0.0

注1, 注2は表3-1と同じ

保育現場における運動遊びの展開（増田 公男）

表 3-3 全体および保育士経験年数群別の 3 観点別遊び経験率（保育者自身）

順位	保育者自身 対象全体	%	保育者自身 S群	%	保育者自身 M群	%	保育者自身 L群	%	
1	1	はないちもんめ	97.7	1	はないちもんめ	96.0	1	はないちもんめ	100.0
2	5	鬼ごっこ	97.7	22	ジャングルジム	96.0	10	だるまさんがころんだ	98.8
3	10	だるまさんがころんだ	97.2	5	鬼ごっこ	94.7	5	鬼ごっこ	98.8
4	16	長縄飛び	96.8	10	だるまさんがころんだ	94.7	2	あぶくたった	97.6
5	13	かくれんぼ	96.3	9	うずまきじゃんけん	93.3	9	うずまきじゃんけん	97.6
6	22	ジャングルジム	95.8	13	かくれんぼ	93.3	13	かくれんぼ	97.6
7	28	鉄棒	95.4	16	長縄飛び	93.3	16	長縄飛び	97.6
8	9	うずまきじゃんけん	94.9	7	氷鬼	92.0	23	うんてい	97.6
9	15	短縄跳び(縄跳び)	94.4	15	短縄跳び(縄跳び)	90.7	27	すべり台	97.6
10	27	すべり台	94.4	27	すべり台	90.7	28	鉄棒	97.6
11	31	ドッジボール	94.0	28	鉄棒	90.7	31	ドッジボール	97.6
12	4	かごめかごめ	93.1	47	人形遊び	90.7	4	かごめかごめ	96.4
13	23	うんてい	93.1	6	色鬼	89.3	15	短縄跳び(縄跳び)	95.2
14	49	あやとり	92.1	8	どろけい(泥棒巡査)	89.3	20	たけうま	95.2
15	29	ままごと	91.7	31	ドッジボール	89.3	22	ジャングルジム	95.2
16	47	人形遊び	91.7	2	あぶくたった	88.0	29	ままごと	94.0
17	45	ハンカチ落とし	91.2	12	ケンパー	88.0	45	ハンカチ落とし	94.0
18	8	どろけい(泥棒巡査)	90.3	23	うんてい	88.0	49	あやとり	94.0
19	12	ケンパー	90.3	29	ままごと	88.0	6	色鬼	92.8
20	2	あぶくたった	89.8	4	かごめかごめ	86.7	8	どろけい(泥棒巡査)	92.8
21	6	色鬼	88.9	49	あやとり	86.7	47	人形遊び	92.8
22	7	氷鬼	88.9	45	ハンカチ落とし	85.3	12	ケンパー	91.6
23	39	草花遊び	88.0	33	サッカー	84.0	24	平均台	91.6
24	24	平均台	87.5	50	お手玉	84.0	7	氷鬼	90.4
25	20	たけうま	87.0	24	平均台	82.7	19	缶ぽっくり	90.4
26	50	お手玉	87.0	39	草花遊び	82.7	50	お手玉	90.4
27	17	ゴム跳び	82.9	18	フラフープ遊び	80.0	39	草花遊び	89.2
28	19	缶ぽっくり	82.4	20	たけうま	77.3	17	ゴム跳び	84.3
29	43	まりつき	82.4	32	自転車	77.3	43	まりつき	83.1
30	18	フラフープ遊び	81.0	43	まりつき	76.0	18	フラフープ遊び	80.7
31	33	サッカー	80.6	17	ゴム跳び	73.3	3	とおりゃんせ	78.3
32	46	おはじき	79.2	42	馬跳び(どう馬)	72.0	33	サッカー	78.3
33	32	自転車	77.8	19	缶ぽっくり	70.7	51	おはじき	77.1
34	14	缶けり	72.7	34	バレーボール	70.7	26	たいこばし	75.9
35	42	馬跳び(どう馬)	72.2	51	おはじき	70.7	30	すもう	74.7
36	30	すもう	70.8	30	すもう	66.7	32	自転車	72.3
37	26	たいこばし	68.5	14	缶けり	65.3	44	山くずし	72.3
38	3	とおりゃんせ	67.1	35	テニス	64.0	14	缶けり	71.1
39	34	バレーボール	65.7	36	野球・ソフトボール	60.0	25	ろくぼく	71.1
40	44	山くずし	65.3	44	山くずし	58.7	42	馬跳び(どう馬)	67.5
41	48	ビー玉	63.0	48	ビー玉	56.0	48	ビー玉	66.3
42	25	ろくぼく	60.2	21	一輪車	54.7	34	バレーボール	60.2
43	36	野球・ソフトボール	60.2	26	たいこばし	53.4	40	陣取り	57.8
44	35	テニス	59.3	41	石けり	49.3	36	野球・ソフトボール	55.4
45	41	石けり	56.9	25	ろくぼく	45.3	35	テニス	54.2
47	40	陣取り	52.3	3	とおりゃんせ	44.0	41	石けり	51.8
48	21	一輪車	45.8	40	陣取り	28.0	21	一輪車	47.0
49	11	Sけん	25.0	37	柔道	24.0	38	剣道	18.1
50	38	剣道	18.5	11	Sけん	22.7	37	柔道	15.7
51	37	柔道	17.6	38	剣道	21.3	11	Sけん	14.5

注1、注2は表3-1と同じ

保育者自身が0.319であり、すべて有意な相関であることが確認された（順に $t=9.93$, $t=4.99$, $t=.486$, df はすべて209, $p<.001$ ）。

大型固定遊具に関して上位15位までをみると、保育者意図では取り上げられることは2種と少なかったが、子ども自由展開と保育者自身では、「すべり台」、「鉄棒」、「ジャングルジム」、「うんてい」の同じ4種が入った。小黒（1996）の15種の好悪の調査結果によれば、幼児は固定遊具への親和性が高く、ここでの「すべり台」、「ジャングルジム」も9割以上のものが好んでおり、他の2種も60%以上に支持されていた。

(2) 保育士経験年数群別の保育活動への意図的取り入れ、自由遊び場面での展開および保育者自身の遊び経験の比較

保育士経験が長いほど豊富な遊びを保育活動で指導、提供したり子どもたちの遊びのなかで観察する機会が多く、保育者としてさらには個人としても豊富な遊び経験を有する可能性が高い。そこで、各観点の遊びについて経験年数群による比較を行った。

今回調査対象とした全保育士の運動遊びの保育活動への取り入れについて、経験年数別にその割合について概観する。上位15位まで（同率が生じたため、順に18位、15位、17位までとなった）を比較した（表3）。S群では、「鬼ごっこ」、「長縄跳び」、「うずまきじゃんけん」が、M群では「鬼ごっこ」と「うずまきじゃんけん」、「ドッジボール」が、L群では「あぶくたった」、「鬼ごっこ」、「うずまきじゃんけん」が、それぞれの上位3位に入った。その他上位に入った遊びのカテゴリーは、伝承遊び、大型固定遊具、スポーツ、鬼遊び等多岐にわたっていた。経験年数にかかわらず共通して遊び率が高かったのは、「鬼ごっこ」（順位は順に1・1・2）、「うずまきじゃんけん」（3・2・3）、「長縄跳び」（2・4・

6）、「あやとり」（6・5・4）、「鉄棒」（5・7・7）等であった。S群とM群では14種類、M群とL群では15種類、M群とL群では13種類が共通していた。

遊びの種類数の共通性について、3つの観点間の相関を求めたところ、S群とM群が.975、S群とL群が.891、M群とL群が.891であり、すべて有意な相関であることが確認された（順に $t=63.49$, $t=26.39$, $t=26.39$, df はすべて209, $p<.001$ ）。相関値からは、S群とM群の近似性がより強かった。

今回の調査で50種類の遊びのそれぞれについて、経験年数の3群による遊びの機会の有無を χ^2 検定で検討したところ、いくつかの典型的なパターンがみられた。まず、意図的な保育活動への取り入れについては、20種の遊びで有意差が確認され、S群ですでに50%を超えその比率が上がる型が6種、M群で経験ありが逆転するタイプとL群で逆転するタイプが各々5種類、経験のない比率が次第に増加するが50%を上回らない対応が3種類で、その他が1種類であった。

つぎに自由遊びでの展開（表3-2参照）については、これも上位15位までを比較検討した（同率が生じたため、順に16位、18位、16位までとなった）。S群とM群では、「ままごと」、「鬼ごっこ」、「すべり台」が、L群は「鬼ごっこ」と「うんてい」、「すべり台」が、それぞれの上位3位に入った。上位15以内に入った遊びは、先と同じく多岐にわたっていた。経験年数にかかわらず共通して遊び率が高かったのは、「ままごと」（順位は順に1・1・5）、「鬼ごっこ」（2・2・1）、「すべり台」（3・3・3）、「鉄棒」（4・4・9）、「ジャングルジム」（5・8・11）等であった。「うずまきじゃんけん」（3・2・3）、「長縄跳び」（2・4・6）、「あやとり」（6・5・4）等であった。S群の上位16種はすべてM

群に含まれており。S群とL群では12種類、M群とL群では14種類が共通していた。

遊びの種類数の共通性について、3つの観点間の相関を求めたところ、S群とM群が.954、S群とL群が.879、M群とL群が.954であり、すべて有意な高い相関であることが確認された（順に $t=45.97$ 、 $t=.26.64$ 、 $t=45.97$ 、dfはすべて209、 $p<.001$ ）。相関値からは、経験年数が近接する2群間の相関がやや高くなっていた。

今回の調査で50種類の遊びのそれぞれについて、経験年数の3群による遊びの機会の有無を χ^2 検定で検討した。21種類の遊びで有意差が認められた。これらの特徴としては経験なしが一貫して高く、その比率が変化する遊びが11種、25年以上になるとありが逆転する4種、ありが一貫して多いが比率が変化する3種の遊び、15年以上になると逆転する遊びが2種あった。

最後に保育士自身の遊びの経験について、経験年数別にその割合について概観する（表3参照）。上位15位までを先の2つの観点と同様に比較した（同率が生じたため、L群については18位までとなった）。S群では、「はないちもんめ」、「ジャングルジム」、「鬼ごっこ」が、M群では「はないちもんめ」、「鬼ごっこ」と「だるまさんがころんだ」が、L群では「かごめかごめ」、「鬼ごっこ」、「だるまさんがころんだ」が、それぞれの上位3位までに入った。ここでも、上位15以内に入った遊びのカテゴリーは、前述と同様に多岐にわたっていた。経験年数にかかわらず共通して遊び率が高かったのは、「はないちもんめ」（順位は順に1・1・9）、「ジャングルジム」（2・15・10）、「鬼ごっこ」（3・3・2）、「だるまさんがころんだ」（4・2・3）、「うずまきじゃんけん」（4・5・19）、「かくれんぼ」（6・6・4）、「長縄跳び」（7・7・6）等

であった。S群とM群、M群とL群、M群とL群のすべての組合せで11種類が共通していた。

遊びの種類数の共通性について、3つの観点間の相関を求めたところ、S群とM群が.902、S群とL群が.791、M群とL群が.899であり、すべて有意な相関であることが確認された（順に $t=30.79$ 、 $t=18.69$ 、 $t=29.67$ 、dfはすべて209、 $p<.001$ ）。相関値からは自由遊びでの展開と同様に、経験年数が近接する2群間の相関がやや高くなっていた。

経験年数の3群による遊びの機会の有無を χ^2 検定で検討した。ここでの保育者自身の経験については13種類で差が現れ、遊び経験が一貫して低いタイプが11、L群でありが逆転するタイプが4、ありが一貫して高いタイプが3、M群で逆転するタイプが2であった。

以上のように遊びは経験年数の群で特徴的なパターンを示した。そこで、一貫して経験率が高いが変動する型と一貫して低い型、経験年数によって有無が変化する型の代表的な遊びを取り上げる。

「とおりゃんせ」は、S群、M群では意図的に取り入れた経験のある保育士は少なく、L群で過半数になる。しかし、自由遊びのなかに展開したケースはいずれも経験年数でも少なく、L群でも3分の1を超える程度であった。自らの経験については、S群では4割を超える程度であるが、15年以上の2群では8割前後に達しており、自らの経験をもちながら保育活動へ積極的に取り入れることは少ないようである。

つぎに「ハンカチおとし」はいずれの経験年数の群でも保育活動に取り入れており、15年以上の2群では、各々7割、9割を超えていた。しかしながら、自由遊びで展開する場合は少ないようで、いずれの経験群でも低くL群でも過半数をわずかに下回っていた。こ

の遊びは、自らはほとんどのものが経験しており、すべての群で85%を超えていた。

最後に、遊びそのものを知らない率が最も高かった「Sけん」では、25年以下では保育活動への取り入れは低く25年以上で3割近くになった。自由遊びでの展開も同様で、さらに低くなっていた。子ども時代の経験では、S群、M群は2割以下でL群で45%であった。3つの観点からの遊び経験について、保育士経験別に典型的なタイプを概観してきた。

これらを踏まえ、意図的な遊びの取り入れ、自由遊びでの展開、自らの遊ぶ経験の3つの観点で選択された遊びの数を3つの経験年数群とともに、遊びの観点(3; 標本内)×経験年数群(3; 標本間)の分散分析を実施した。各群の平均値と標準偏差を表4に掲載した。分散分析の結果、遊びの観点および経験年数の主効果が認められた(順に $F=246.68$, $df=2/208$, $p<.001$; $F=19.84$, $df=2/416$, $p<.001$)。遊びの観点では、保育士自身の経験のある遊びが圧倒的に高く、自由遊びでの展開がもっとも低かった。下位検定の結果、それぞれの差に有意差が確認された(すべて $p<.01$)。経験年数による差異は、L群がここでも他に比べて明らかに高く、M群とS群の差は少なかったが、3者でのそれぞれ2者間の差は有意であった(M群とL群の差は、 $p<.05$, その他は $p<.01$)。

また、遊びの3つの観点毎に経験年数群間の差異について下位検定を行ったところ、保育士自身のM群とL群の差が有意でなかった以外は、すべての差が有意であった。さらに、

表4 経験年数別の運動遊びの3つの観点別の平均遊び種類数と標準偏差

	保育者意図	自由展開	保育者自身
S群	20.4 (9.60)	20.6 (6.13)	37.1 (11.20)
M群	25.1 (11.35)	23.7 (9.55)	39.9 (8.98)
L群	33.1 (8.35)	27.6 (9.83)	41.9 (6.03)

経験年数毎に遊びの観点間の違いについては、全体のみならず保育士経験年数間の経験率でも、S群とM群で意図的な導入と自由遊びの展開との間に有意な差異が認められなかった以外は、すべて1%水準以下で有意差が確認された。

3. 経験年数による遊び方法の知識

付随的に収集した保育者自身が知らない遊びについての質問に関して、知識と経験年数(年齢)には、関係性が認められた。すべての経験年数群とも遊びの知識は高かったが、経験年数が長い方、特にL群の経験者は他の2群に比べて遊びの知識が高く、知らない遊びの平均種類数はわずかに1.49%であった。S群とM群では差はなく、それぞれ3.15%、3.17%であった。これには、子ども時代の経験や保育士の経験とともに知識が増えていったという側面もあるが、提示された50種類の遊びには伝承的な遊びが多く含まれており、伝承される機会が減少し(青野, 2013他)、しだいに遊ばれなくなったことにより、経験年数との関係があらわれた可能性もあると考えられる。

50種類のうち全体で5%以上の保育士が知らない遊びは、表5に示したように9種類あり、「Sけん」が最も多く50.0%があげ、「陣取り」(22.2%)、「とおりゃんせ」(12.5%)、「ろくぼく」(12.5%)、「石けり」(10.7%)、「山くずし」(10.2%)とつづいた。前述のように経験年数が長いほど認知度は高く、「Sけん」においてはL群では73.1%が知っていたが、S群では46.2%、M群では41.1%にとどまった。「Sけん」そのものは児童期が中心と考えられるの遊びであるが、このように経験年数間差が認められ、次の世代に遊びを伝えるという伝承性を重視する立場からすれば、そうした遊びの意図的な取り入れが課題と思われる。

表5 全体および経験年数別の知らない遊びの百分率（全体で5%以上）

%	全体	S群	M群	L群
Sけん	50.0	53.8	58.9	26.9
陣取り	22.2	37.4	17.8	13.7
とおoryんせ	12.5	23.1	6.9	0.0
ろくぼく	12.5	19.8	12.3	0.0
石けり	10.7	12.1	13.7	1.4
山くずし	10.2	13.2	9.6	3.8
ビー玉	7.4	6.6	11.0	1.4
たいこばし	6.9	12.1	5.5	0.0
剣道	5.1	5.5	2.2	6.8

ここでの上位4位までの未知率を、異なる調査方法による伝承遊びの調査（松垣，2016）と比較すると、「Sけん」については50.0%と近似していたが、「とおoryんせ」と「陣取り」は本研究の約2倍に達しており、各々25.0%、59.6%であった。両研究は20歳代から50歳代以上の保育士を対象としていることでは共通していたが、調査地域が福岡県であったことが認知度の違いに影響していた可能性がある。実際、東海地域（41.0%）は、九州・沖縄地域（27.0%）に比べて伝承遊びの実施率は高いという調査もある（種丸ら，2007）。

また、本研究で提示した50種の遊びの種類に基づいた森・岸本ら（2002）も、伝承遊びを知らなかったり、実施されないことは「文化の継承・伝承」の側面からの懸念を指摘していた。この調査でも「Sけん」の未知率は高く、今回の結果と極めて近似していた。森らでは「うずまきじゃんけん」がもっとも未知率が高く67.4%であったが、本調査では保育者自身の遊び経験が94.9%に達しており、知らない保育士は0.9%でほとんどのものが知っており、大きな差が生じた。未知の比率が10%を超える遊びは、森らでは4種であったが本調査では6種あり、伝承遊びが大部分を占めるとともに上位5種のうち2種は共通していた。

石川・加藤（2013）は、児童期低学年での伝承遊びに関する報告の中で、池田（1993）の事例を示しながら伝承遊びの意義を唱えている。そこでは、運動的な側面のみならず、経済的、物質的豊かさが伝承的遊びを奪ったとし、コミュニケーション不足が社会性の低下につながることを懸念していた。

運動をともなう遊びや戸外での仲間遊びは、体力や運動能力、健康といった身体面のみではなく、社会性や対人関係、認知的な発達にも効果があることが知られている。これらの遊びが減少している現在、保育の場での過ごし方が大きな意味をもつことになる。本研究対象の保育士はこうした遊びに対して積極的であり、遊びの知識も高い。したがって、計画的にシステム化された指導計画を導入することによって、子どもたちの発達に貢献できる可能性は高い。

【要約】

本報告は、公立保育所の保育士を対象に幼児の運動をともなう遊びの保育への意図的な取り入れについて、その意識を調査するとともに、具体的な50種の運動的遊びに対して次の3つの観点から評価させた。それらの観点とは、保育者が保育現場で指導計画に意図的に取り入れてきたか、子どもたちが自由遊びでのなかでどのように展開していたか、保育者自身がどのような遊びを経験してきたかであり、保育者としての経験年数の要因の側面からそれらを検討した。

その結果、保育者はいずれの運動遊びに対しても、保育活動への意図的な取り入れに対して積極的であった。保育士としての経験年数別の得点比較では、25年以上のL群がもっとも高くなっていた。

50種類の具体的な遊びについて、先の3観

点からの遊び経験のある種類数の分析からは、保育者自身の遊び経験がもっとも高く、指導計画への意図的取り入れ、自由遊びでの展開とつづいたが、後者の2つの観点の差は少なかった。経験年数別の比較では、いずれの観点でも経験年数が長い方が遊び経験の数が多かったが、10年以下のS群と10年以上25年以下のM群の差は少なかった。また、各観点で同じ遊びが上位に位置する傾向があり、相関係数からもその傾向が認められた。そして、3つの経験群間での比較では、全体と同様に保育士間の遊びの数でも各遊びの経験率でも上位に位置したのもでも共通性が高く、両者とも3年齢群間には正の有意な相関が確認された。

引用文献

- 穂丸武臣・丹羽 孝・勅使千鶴 2007 日本における伝承遊びの実施状況と保育者の認識，名古屋市立大学大学院人間文化研究科，人間文化研究，7，57-78.
- 青野光子 2013 伝承遊びに関する研究（1）～保育に活かすお手玉遊びとして～ 新潟青陵大学短期大学部研究報告，43，77-85.
- 藤田公和・石橋 満 2001 幼児の運動能力発達におよぼす「意図的な働きかけ」の影響，体育の科学，991-995.
- 桧垣淳子 2016 保育現場における伝承遊び－保育者の視点より－，中村学園大学・中村学園大学短期大学部，研究紀要，48，43-50.
- 細川賢司 2014 保育中の運動遊びにおける保育者の関わりと幼児の運動量の関係：5歳児のサッカーゲームに着目した事例的研究，教育学論究，6，209-220.
- 池田裕恵(編) 1993 子どもの遊び百科，ソフィア.
- 井上功一 2014 小学校における体力向上プログラムの継続実践による影響について－体育授業時での実践－，大阪教育大学紀要，第V部門，63，1，123-132 .
- 井上芳光・山瀧夕紀・谷 玲子 2006 母親の運動経験・活動性が幼児の運動量・運動能力に及ぼす影響，日本生理人類学会誌，11，1，1-6.
- 石川 恭・加藤玲香 2013 小学校体育科への伝承遊び導入について：子どもたちの直面する様々な問題との関わりから，愛知教育大学教育創造開発機構紀要，3，19-25.
- 木村美知代・村岡眞澄 2009 運動遊びを楽しむ幼児を育てる，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，12，237-242.
- 工藤ゆかり・江刺家由子 2016 幼児期の運動遊びの必要性－毎日，楽しく体を動かすためには－，帯広大谷短期大学紀要，53，27-36.
- 文部科学省 2011 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 (http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/；2016年11月10日)
- 文部科学省 2015 平成27年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査 集計結果 (http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1364874.htm；2016年11月10日)
- 文部科学省 中央教育審議会答申 2002 子どもの体力の現状と将来への影響 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344530.htm/；2016年11月10日)
- 文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課 2009 平成21年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査結果. (http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1287864.htm/；2016年11月10日)
- 森 博文・岸本 肇・栗原武志 2002 幼児・学童期における遊び経験に関する研究－幼児教育専攻学生に関する調査から－，九州女子大学紀要，人文・社会科学編，39，1，31-44.
- 森 司郎・杉原 隆・吉田伊津美・近藤充夫 2004 園環境が幼児の運動能力発達に与える影響，体育の科学，54，329-336.
- 村岡眞澄 2001 運動に意欲的でない幼児の変容のプロセスと保育者の指導及び他の要因との関係，愛知教育大学教育実践センター紀要，4，95-101.
- 中 俊博・大河内千恵 2006 運動遊びによる幼児の活動性の育成，和歌山大学教育学部教育実践センター紀要，16，117-126.
- 日本体育協会スポーツ科学委員会 1982 体力テストガイドブック，日本体育協会スポーツ科学委員会編集，ぎょうせい，7-13.

- 小黒美智子 1996 幼児の運動遊びに関する研究－遊び場の固定遊具の活用に関する調査から－，新潟青陵女子短期大学研究報告，26，25-38.
- 小黒美智子 1998 幼児の運動遊びに関する研究－幼児の運動遊びの環境と保育者の意識に関する調査より－，新潟青陵女子短期大学研究報告，28，49-62.
- 杉原 隆 2008 運動発達を阻害する運動指導，幼児の教育，107，2，16-22.
- 杉原 隆・近藤充夫・吉田伊津美・森 司朗 2007 1960年代から2000年代に至る幼児の運動能力発達の時代変化，体育の科学，57，1，69-73.
- 高原和子・角南良幸・瀧 信子 2014 身体活動を取り入れた遊びが幼児の体力・運動能力に及ぼす影響について，福岡女学院大学紀要，人間科学編，15，63-71.
- 高見京太・涌井忠昭 2011 幼稚園における任意の運動遊びプログラムへの参加状況と幼児体力テストの結果との関係，法政大学スポーツ健康科学研究，2，1-6.
- 山田 洋・加藤達郎・知念嘉史・相澤慎太・塩崎知美・三上恭史・長堂益丈 2007 幼児期の運動機能向上のための「運動遊びプログラム」の提案 第二報－介入幼稚園におけるコントロール測定の結果について，東海大学スポーツ医科学雑誌，19，33-37.
- 山田 洋・長堂益丈・鎌田雄二・陸川 章・塩崎知美・木塚朝博・加藤達郎 2005 幼児期の運動機能向上のための「運動遊びプログラム」の提案，東海大学スポーツ医科学雑誌 17，72-77.
- 柳田信也 2008 幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究，国際学院埼玉短期大学研究紀要 29，21-26.
- 幼児期運動指針策定委員会 2012 幼児期運動指針ガイドブック，文部科学省.

謝辞

本調査を実施するに当たり，愛知県瀬戸市立保育所の保育士の方々の協力を頂いた。ここに記して，こころより深く感謝の意を表します。